

ネギ栽培の省力化をめざしたセル育苗法

鈴木 勝治・小野 恵二*・岡崎 幸吉

(山形県立農業試験場・*寒河江農業改良普及所)

Cell Nursery Method of Welsh Onion for Labor Saving Culture

Katsuji SUZUKI, Keiji ONO* and Koukichi OKAZAKI

(Yamagata Prefectural Agricultural Experiment Station*)

*Sagae Agricultural Extension Service Station

1 はじめに

ネギの栽培において育苗、移植労力は大きなウェイトを占める。従来育苗においては、育苗面積が栽培は場面積の1割を占め、間引き、除草などの労力が必要であった。また、移植においては、苗の抜き取りを行い、移植機で1本1本移植を行っているのが現状である。本試験では、これらの労力を省力化し、スピード化を図るための検討を行った。

2 試験方法

(1) 試験区

試験A は種期、セル規格

① 12月16日, 1月16日, 2月17日, 3月17日

② セル規格200, 220

は種量 セル当たり3粒

用土 ピートモス主体用土

追肥 1カ月2回

試験B は種量

① セル当たり1粒 ② 3粒 ③ 5粒

セル規格200

用土 ピートモス主体用土

追肥 1カ月2回

は種 2月17日

試験C 育苗用土, 追肥

用土 — ①ピートモス主体用
— ②ピートモス主体用土+土(50:50)
— ③農試慣行育苗用土

追肥 ①0回

②3回(16日間隔)

③6回(8日間隔)

④12回(4日間隔)

微量元素を含む液肥500培養液1ℓ/トレー

セル規格200

は種 2月17日

は種量 3粒

(2) 試験規模 1区 2セルトレー 1区制

(3) 栽培概要

供試品種; 吉蔵(武蔵野種苗園)

育苗; 棚育苗, 簡易灌水施設利用

移植; 4月21日 機械移植(機種:S社)

※共通項目

棚育苗, 簡易灌水施設利用

機械移植(機種:S社)

3 結果及び考察

(1) は種期

茎径は、12月は種区は3月の調査時において2mmであり、定植可能であった。セル規格の比較では、220#で生育が進んでおり、これはセル容量の差が出たものと思われる。200#では、1, 2月は種区で4月20日に2mm程度であった(図1)。葉長は、セル規格に大きな差はみられず12月は種区で27cm, 2月で20cm程度であった。(図2)

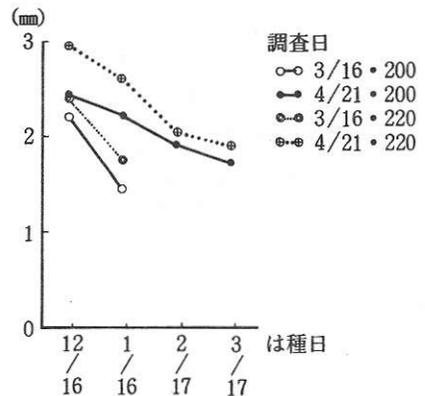


図1 ネギの種類, セル規格別茎径

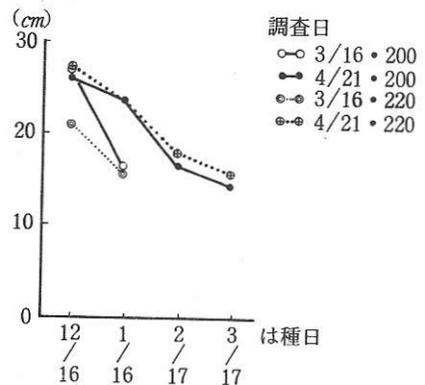


図2 ネギのは種, セル規格別葉長

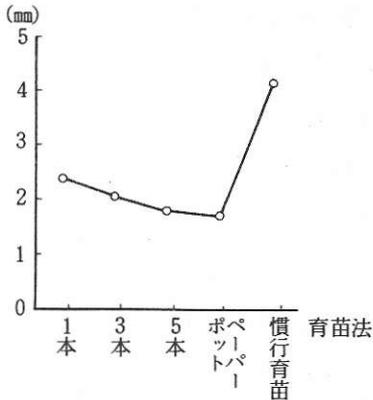


図3 ネギの苗仕立て本数別茎径

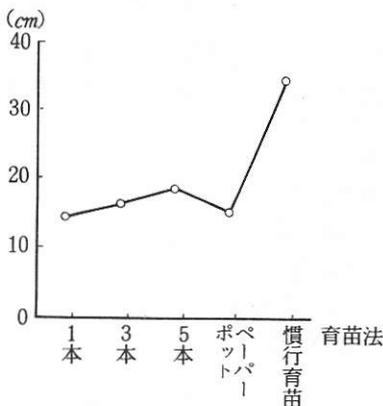


図4 ネギ苗仕立て本数別葉長

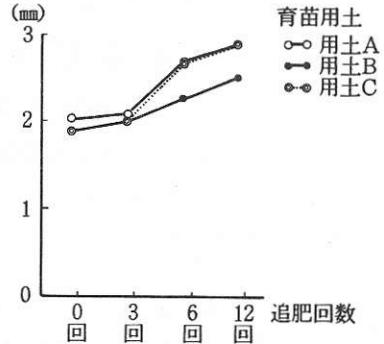


図5 ネギ用土, 追肥回数別茎径

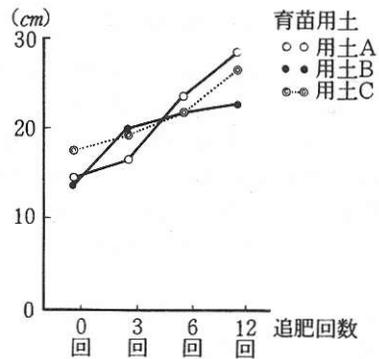


図6 ネギ用土, 追肥回数別葉長

4 まとめ

(2) は種量 茎径は、は種量が増加するほど細くなった。ペーパーポット育苗は棚育苗に適切でないと思われ、生育が劣った。慣行育苗は、根域が大きいため生育が旺盛となり、4mm程度までになった(図3)。葉長は、は種量が多いほど長くなり、徒長した(図4)。

(3) 育苗用土, 追肥

茎径は、4日間隔, 8日間隔に追肥を行った区で肥大が大きかった。用土Bは、土壌の理化学性が悪かったと思われ、生育が特に劣った(図5)。葉長は、追肥回数が増加するとともに長くなり、4日間隔に追肥を行った区でやや倒伏が見られた(図6)。

(1) は種期: 12月には種を行えば3月には定植可能である。4月中旬に定植を行う場合、セルトレー規格200#を用い、1~2月には種すれば移植可能な苗が得られる。220#は、生育は良いが、余分な土量が多いため機械移植に適さない。

(2) は種量: セル規格200#を用いた場合、機械移植に適する苗を得るには、は種量は3粒が限度と思われる。

(3) 育苗用土, 追肥: 育苗用土は市販のピートモス主体の用土もしくは、排水保水の良い慣行の育苗用土をふるいでふるったものが良い。追肥は、液肥の500培養液を1週間に1度程度与えれば良い。